

#### 4) 拡張型心筋症 (DCM) に冠攣縮性狭心症 (VSA) を合併した1例

落合 幸江・田辺 直仁 (燕労災病院  
循環器内科)  
渡辺 賢一  
広川 陽一 (三之町病院  
内科)

DCM は冠動脈病変を持たない原因不明の心筋変性疾患で、狭心痛をきたすことはまれである。今回私達は心臓カテーテル検査で DCM に VSA を合併した症例を経験したので、報告する。

症例は69才の男性。7年前に DCM と診断され某院より投薬を受けていた。平成6年2月1日午前0時30分胸痛で覚醒し、ニトロ舌下で軽快したが消失しなかった。冠拡張薬投与で2月3日には胸痛は消失した。2月21日胸痛の原因精査目的に当院に転院した。入院後に行なった心臓カテーテル検査では左室造影で EDVI 141 ml/m<sup>2</sup> EF 45.6% と壁運動はび慢性に低下し左室は拡大していた。心筋生検では心筋細胞は大小不同で、心筋間の繊維成分が増加していた。また冠動脈造影では有意狭窄はみられなかったが、エルゴノビン負荷で RCA#1 が50%狭窄から99%狭窄になり胸痛が出現した。以上より本症例の診断名は DCM+VSA と考えられた。

#### 5) 結核性心外膜炎の1例

横山 明裕・筒井 牧子 (信楽園病院  
循環器科)  
川合 弘一 (同 内科)  
森田 俊 (同 病理)

症例：78歳男性。職業は鋳造工場に勤務していた。現病歴：93年11月上旬より呼吸困難、食欲低下、微熱があり近医から紹介され12月1日当科入院となる。入院時現症：身長 156 cm、体重 58 kg、体温 37.5℃、脈拍90/分整、頸静脈が怒張し、血圧 126/76 mmHg、奇脈(吸気時に最高血圧が 12 mmHg 低下)を認めた。ECG は洞調律で低電位差。入院時検査所見で、CRP 11.0 mg/dl と炎症所見あり。心エコー上著明な EFS を認め、pericardial centesis 400 ml を行った。pericardial effusion の細菌培養、病理学的検査を行った。12月中旬頃39℃を越える高熱が出現し、血液培養からカンジダが検出され、抗真菌剤、抗生剤、ステロイド療法を試みるが、DIC が悪化して12月30日死亡。解剖の結果、心外膜に結核特有の病理所見および抗酸菌が認められた。後日抗酸菌培養は陰性との報告を受けた。近年、結核性心外膜炎を経験しない若い医師が増えており、報告することにした。

## II. テーマ演題「高血圧の治療」

### 1) 腎不全に伴う高血圧の治療

鈴木 靖 (済生会第二病院  
内科)  
青池 郁夫・下条 文武 (新潟大学第二内科)  
荒川 正昭

血圧は、正常人においては、昼に高く、夜間に低下することがわかっている。本態性高血圧においても、多くの場合、その血圧の程度によらず、同様なパターンを示すといわれている。我々はこのことを携帯型自動血圧計を用いて確認した。これは、降圧薬服用中の例においても同様であった。また、1日の平均血圧は午前10時の血圧で代表できることも示唆された。一方、腎障害、特に腎不全を伴う高血圧においては、夜間から早朝にかけて血圧が上昇する例が見られ、この血圧上昇は、長期間作用型といわれている薬剤を用いても、抑制し得なかった。さらに、本態性高血圧とは異なり、午前10時頃の血圧と1日の平均血圧は分離していた。以上より腎不全を伴う高血圧の治療に当たっては、10時頃の血圧は、血圧コントロールの目安にはならず、自動血圧計などにより、その変動に注意することが必要であると考えられた。

### 2) SHR の成長と心筋カテコラミン濃度とアドレナリン性 $\alpha_1$ -、 $\beta_1$ - 受容体及び $Ca^{2+}$ -受容体について

渡辺 賢一・鷲塚 隆 (燕労災病院  
循環器内科)  
草野 頼子

高速液体クロマトグラフィー法を用いたカテコラミン濃度の測定法と、ラジオリガンド・バインディング・アッセイ法を用いたアドレナリン性  $\alpha_1$ - と  $\beta_1$ - 受容体および  $Ca^{2+}$ - 受容体の性状(解析定数 Kd や最大結合数 Bmax)の測定を用いて、自然発症高血圧ラット (SHR) と対照動物である Wistar-Kyoto ラット (WKY) の心筋におけるカテコラミン濃度とアドレナリン性  $\alpha_1$ - と  $\beta_1$ - 受容体および  $Ca^{2+}$ - 受容体の役割およびこれらに対する薬物の効果について検討した。SHR では成長に伴って心筋内カテコラミン濃度が上昇し、16週齢では2週齢の約2倍に上昇し WKY より高値を示した。WKY 心筋のアドレナリン性  $\beta_1$ - 受容体数は、逆に16週齢では2週齢と比較すると約50%に減少した。16週齢 SHR の心筋では対照群と比較するとアドレナリン性  $\beta_1$ - 受容体数と  $Ca^{2+}$ - 受容体数の増加がみられたがアドレナリン性  $\alpha_1$ - 受容体数は差が認められなかった。一方、 $\alpha_1$ -